
アニメキャラ混じり、学園

シンシヨク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アニメキャラ混じり、学園

【Nコード】

N5835I

【作者名】

シンシヨク

【あらすじ】

とある高校生がイメージした

イメージが具体化する町で望んだ、物語。

それは・・・「自分の学校にアニメ、漫画のキャラを登場させる」

はたしてどんな物語になるのか・
・
・

イメージの前に・・・（前書き）

原作的にはハルヒにしましたが、他にもいろいろでる予定なので

イメージの前に・・・

「学園」というジャンルのつく漫画やライトノベルは今の時代何故か沢山ある。それは何故か？多分ボクが思うに、学園という空間においてはいろいろなイベントや他のジャンルの設定を盛り込むことができるからだと思う。例えば、無茶苦茶な世界設定だとしても学園の中なら多少の無茶は通じるものである。結局学園物というのはジャンルの固定がないような感じに取られる、例えば「恋愛」、また「友情」、ただ純粹に「青春」のことを書くだけでも学園物語は成立するのである。

しかしそれらは絶対に否定しないで欲しい。ボクが言ったことは、全て創造。それにこの小説も結局は学園物として定着する。ならば何をしても許される、学園物・・・かどうかは分からないがボクはしたいように物語を作るまで。造りたいように造ることができるのがこの型湧市という町の能力。

この型湧の地ではその概念は現実に現れるようになっていく。それが本当かどうかは喫茶・現鏡で働いていたときにすでに経験している。さてここでボクが何をしたいのか言っておくことにしよう・・・と、思ったのだが実際にみたほうが早いと思うからそろそろ一人語りは終了することにする。さて、ここからが物語。ボクが望んだ物語。

イメージの前に・・・（後書き）

まだ、思いつく範囲が少ないですが、とりあえず頑張って続きを書きます

1話『ただの人間には興味ありません』・前編（前書き）

二次創作ですが、この話だけは別作品のキャラはまだ登場しません。

1話『ただの人間には興味ありません』・前編

ボクの名前は、希汐^{きせき} 御利斗^{みりと}。この物語の進行人、というか構築人と言ったほうが適切かもしれない。
どういう意味かはこれからの日常を見れば分かってくると思う。
なので余談はここまでにしておく。ここからがボクの日常。

「たまに、漫画とかでさ自分の思う方に展開を持っていきたくなる時ないか？」

「・・・はい？」

いつものごとくいきなり、話し始めたのは、ボクの（類）友達。二本^{ふた} 浩二^{こうじ}である。ボクも好きな漫画、アニメ、ゲームなどにおいて話が合うので学校では一番の親友であるのだが、伏線も無しに何か話し始めるときがある。

「えっと、つまりどういうことだ？」

聞き返す選択肢にしてみた。

「だから、漫画とかゲームとかで、展開が気に入らないときがあるだろ。」

「んー。まあ確かに。」

「そこで、勝手に自分で別の結末を妄想することがあるだろ、って言う話しをしてるんだよ。」
言われてみると同感する部分は確かにある。漫画やゲームが自分と

は全く関わりのない所で全く面識の無い人が作っている以上、そういう感覚は少なからずある。しかし・・・

「結局そういうのがあるから漫画やゲームだろ」

結末が自分の思ったとおり全部いくのなら、どこかで見るのをやめている。分からないからこそ面白いし、想像が膨らむのだ。

「・・・やっぱりお前はそう言うか・・・」

体力が脱力したような、少し眩き加減な感じで浩二はそう答えた。一体どう言えば、ボクの台詞っぽくならないんだろう。

「じゃあどう話がまとまったら満足なんだ」
そう聞くと浩二は、

「つまりだ！勝手に想像するだけじゃなくって、作ってみるべきだ
と思うんだよ！」

「・・・・・・・・・・」

一時的に無言を作ったが、簡単に言うと、

「・・・想像だけでは物足りないってことか？」

「その通り！」

躊躇なく断言されても、反応に困るだけなのだが、とりあえず話を前向きに聞いてやることにした。

「で、想像だけでは物足りないって一体どうするつもりなんだ？同人漫画か、小説でも書くのか？」

自分が納得いかなかった構図を自分で勝手に変えて自作漫画や自作小説にしたものが同人である。それでも始めるのかと思いついてみると、

「え？同人？何で俺がそんなことするんだ。とくに何もするつもりは無いが。」

本の少しキャラがひっくり返ったような言い方で浩二は答えた。

「じゃあ何でそんなこと言い出したんだよ？」

ちょっと反論してみた。ここまできて無駄な事を話しているとは到底思えないからである。

するとなんとその解答は一言で返ってきた。

「つまんないから」

「まったく浩二のやつ何にもないんなら、あんなに力説するなっ
ーの」

先ほどの浩二の「つまんないから」の一言で終わりを迎えた話は、それと同時に昼食時間の終わりを迎えてしまったため、俺は空腹の腹にいらだちを覚えながら、午後の授業を愚痴をこぼしながら受けていた。時々眩暈がする・・・

キンコーン・カーンコーン

授業の終わり、および今日の授業終わりのチャイムが鳴り響いた。

「腹へったな」

空腹を愚痴りつつこれからの予定を考えていると、一つ忘れていたことが頭にうかんだ。

「そうだ、部活に行こう。まだ籍はあったはず。」

ボクは久しく行っていない、部活に顔をだすことにして、人がまばらな教室からでた。ちなみに部活に顔をだすといってもただ昼食べれなかった弁当を静かに食べるためだけに行くのだ。

「文芸部か・・・一ヶ月ぶりだな。」

何となく思うことがあるのだが、文芸部というのは具体的に何をする部活なのか？という疑問がある。文芸と書くくらいだから本を読んだり、本を書いたり(?) くらいの発想が出てくるが結局それだけである。ボクが思うに学校の中で一番目的要素がはっきりしない部だと思う。

「具体的に何をするのか、ちゃんと納得する説明ができる人がいたらしてほしいものだ・・・。」

そう呟いた瞬間、何か空気が変わったというか、悪寒がしたというか、どっちにしても今から悪い展開が起きる可能性大と、俺の頭が告げていた。

「何か、近づいてくるような。逃げたいけど、逃げたらエンドレスの予感・・・」

そろそろ自分でもこの悪寒の理由が分かってきた。分かったからには対処の準備に入るしかなかった。

「（慎重になれ。油断すれば軽く怪我することになる。）」

ボクは神経を研ぎ澄ませ、周りを警戒する。そのとき

ヒュン

「（何だ今の音・・・っておわっ!）」

音の正体を不思議に思った瞬間、何かの数発俺目掛けて飛んできた。間一髪避けたのは慣れかな。ボクは後ろを見て飛んできた物の正体を確認する。それは

「え？チョーク？」

投げ込まれたのはチョーク8本。しかし全本軽く床に減り込み、直立したチョークが並んでいた。危険だ。

ボクは一旦、態勢を立て直そうとしたが

ガラガラガラガラ

「!?!?!?。今度は何の音だ!?!」

音に警戒し、周りを見てふと上を見上げてみると、何か、薄っぺらい物が落ちて・・・

「うわっ!!何!?!」

落ちてきたものを確認する。それは

「分度器!?!、しかも教師用・・・」

学校に通えば必ず見たであろう、黒板用の大きな分度器。まるで拷問のギロチンのごとく落ちてきた。

「ふう〜。今日はちょっと手がこってないか?寿命が縮むぞ。羽月。」

そう呼びかけると、柱の後ろから、ボクがよく見る顔の女子が現れた。

「ふっ・・・よく私だと見破ったね。」

「学校の備品を凶器に使うのは、学校の中でお前しかいないって。全く、何処から持ってきたんだよ。」

ボクはチョークや分度器を指して言った。そして振り返ると真顔で答えた

「何処って、特別教室に職員室に生徒会室だけど。」

「平然と言うな、平然と。軽い説教だけで済むだろうが、見つかったらどうするんだよ。」

そう言うと言い直ったように

「それで済むんだがらいいでしょ。退学になるわけじゃあるまいし。」

「まったく・・・退学にはならなくても単位のことを頭においときよ。」

説明が遅れたが、目の前にいる文房具を凶器化させる女子は、しおとめ汐留羽月はづきと言う。一応文芸部員の一人である。

「単位なんて、テストがしっかりしてればなんとかなるよ。」

「まあ、否定はしないけどむやみやたらに学校の備品を持ち出すなって」

話が正当化しているのか、いないのかイマイチ分からない。

「『学校の備品』だもん。とくに気にする必要ないでしょ？」

「その質問には同意できないな。」

そう言うと、少しむくれたように羽月は顔をそらした。一応話の折をつけておこう。

「まあとりあえず、ボクは部活に行くからな。」

そう言って羽月の横を通るつもりで歩こうとした時、羽月が急にこっちをみて答えた。

「え？リト。もしかして知らないの？」

「ん？何が？。あと、リトって呼ぶな。」

何の話か分からず、当然の返答を試みた。

「別にいいでしょ。『御利斗』を略して『リト』。全然違和感ないじゃん」

「某漫画の主人公の名前みたくにするな。気を遣うだろ。」

そう反論すると、羽月は

「そんな細かいことに気を遣ってたら女の子にモテないよ。」
「うっ……………」

痛いところを付かれてしまった。というかすでに慣れていると思っていたけど。ボクはこの話題からダッシュで逃げたくなってきた。

「ボクは漫画のリトみたく、モテないよ。どうせ女の子との縁がまったく無い人ですよ。」

心が折られたため、本気で呟き加減に愚痴るボクがいた。

「ハァ……………話を戻すけど」

今話したのは、ボクではなく羽月だ。何でため息をついてるんだ？
ため息つきたいのはボクなのに

「何？」

むこうから話を元に戻してくれるのは有り難かった。これ以上心を折らされるのは御免こうむなる。

「だから、リトが知らないこと。さっき先生に言われたんだけど」

「??.?」

「文芸部、廃部になったらしいよ」

「はい?」

「文芸部、廃部か。」

まあ何となく、予想しりえたことだ。最後にボクが文芸部に行ったとき、部室にいたのは3人だった。しかも話を聞いたところその3人の内2人はボクと同じ、幽霊部員状態だったという。

「部長がさ、」

羽月がそう言わかけるとボクは、

「いや、みなまで言わなくていい。大体分かる。」

と静止させた。どんな部活も存在していた以上1人は部活に真剣だった人がいる。ただ部活を続けたいという願いが学校側に届かなかっただけのことだ。

「冷たいんだね。入ってたのに」

ちょっと軽蔑気味といった感じに羽月が言ってきた。

「幽霊部員だったんだから、しょうがないだろ。」

「まあ、そうだけどさ。」

結局毎日行かなければ何も思いは感じないものということだ。とはいえ、潰れてしまったということは、勝手に使えないということなので、ボクは弁当を食べるのを断念することにした。

「あれ、帰るのか？」

「うん。伝えたかったただけだから。じゃあね。」

そのときふと思ったことがあった。

「あ・・・羽月。」

すると羽月は振り向いた。

「何？」

ボクは一つ聞きたいことがあった。それは、

「あのさ、季連は元気にしてるか？」

そう聞くと羽月は不思議そうに答えた。

「元気にしてるか？って変なの。この間まで一緒に仕事してたのに」

「え？あ、まあそうなんだけどほら一ヶ月、行方不明になったときもあったからさ。」

「とくに変わらないよ。でも変わったことと言ったら、最近やけに意味深というか、意味不明な言葉言うようになったかな。『季節が巡るのはいい事』とか、『晴れた日も雨降りな日も必要』みたいなこと」

「そ、そうか。」

季連というのはボクの喫茶・現鏡で働いていたときの仕事仲間だった奴だ。

そして、季連の妹がこの羽月にあたる。こうやって話すのはその縁あってだ。

「じゃあ話はそれだけだからじゃあな。」

「うん。またね。あ、そういうえば部活どうするの?」

「部活?」

ボクは首を傾げてそう答えた。

「これからつまらなくなるからさ。」

つまらなくなる。その言葉は少し寂しい感じがした。

一応適当に答えることにした

「分からない。入らないかも。じゃあな。」

そう言ってボクは腹が減ったまま帰路につくことにした。

家に帰り、冷めている弁当を電子レンジで温め、ボクは弁当を夕飯がわりにして食事を終えた。食べ応え、少しぼーっとしていると少

し思いたったことがあった。

『つまんないから。』

『つまらなくなるからさ』

浩二や羽月の偶然にも一致していた言葉がボクの頭に残り、何故か離れなかった。

「（『つまらない』・・・確かに、ボクもたった半年でこんなに毎日がつまらなくなるなんてな。）」

喫茶・現鏡で働いていたときは楽しいこともあれば、辛いことも数々あった。それに、季連に対してはとても悪いことをした場所である。

しかし、現鏡が閉店してからはどんどん退屈になった気がする。

「ふー。でも、ボクにはあんな稼業はできないしな。」

思い返せば思い返すほど、自分が手伝っていたことが、一人の力では無理だということを思い知らされる。
じゃあどうすればいいのだろう。

「んー・・・」

急にバサツという音がした。音の方を見てみると本が本棚から一冊落ちていた。ボクはそれを元に戻すため本を手にとった。本の表紙には

『型湧の歴史』

と書いてあった。

「そうか、うん。やってみよう！」

本の表紙を見てボクは一つの、可能性に賭けてみることにした。試すはこの町の特長、『想像の具現化』しかしこの力を自由に発動できた人はいない。

「ならば、駄目元でやってみよう！」

とはいえ、ボクが習ったことでは『想像の具現化』は人一倍強い表現力と、感受性。さらにどれだけこの町に働きかけられるか。後者の結局運任せだが、やってみよう。

ボクは、自室の電気を消し、ベッドの上であぐらを組んで目を軽くつむった。そして一回深呼吸をする。

「ふー・・・」

「（想像するなら、今日あったことの言葉から拾ったほうが、想像しやすい・・・）」

ボクは今日聞いてきた頭に残っている、言葉を弾き出す。

「（漫画、小説、ゲーム、文芸部、つまんない、エンドレス、学校の備品、晴れた日、SOS。）」

数はかなり少なく、釈然としないものが多いが、ここから想像でき

るものをイメージする。

それを頭に残した状態でボクはそのままベッドに横たわり、眠りに
ついた。

1話『ただの人間には興味ありません』・前編（後書き）

まだ何も始まっていませんが、これからやっていきます。

後編にはちゃんと別作品キャラが登場してくる予定です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5835i/>

アニメキャラ混じり、学園

2010年10月13日12時25分発行